意図性尺度評定における直観教示と思考教示

妻藤 真彦

(美作大学大学)

キーワード：尺度評定，教示の効果，評定の確信度

Instructions dictating intuitive or deliberate judgments in scale ratings for intentionality

Masahiko Saito

(Mimasaka University)

Key Words: scale rating, effect of instruction, confidence rating for a scale rating

目 的

評定尺度について、内的に量的な情報があることが仮定されるが、これに疑義を唱える立場もある (Michell, 2012)。しかしもし量的表象が存在しない場合があるなら、逆に尺度評定を強制するとできてしまうのはなぜかという問題がある。Rosenbaum & Valsiner (2011) は、質問文の“意味づけ”と制御的思考によって回答するという仮説を提案。他方 Lieberman, Jarcho, & Satpute (2004) は、質問への回答を、その都度考える“証拠ベース”判断と、経験の多い事項での自動的判断があるとしている。すると尺度評定についても、Rosenbaum & Valsiner (2011) のような制御的思考で回答する場合と、何らかの自動処理による場合があるかもしれない。その自動的判断の一つの候補として、妻藤 (2007) は 2 値的表象しかない (考えられない) 場合に、その判断の確信度が自動的に尺度値に変換されるという仮説を検討した。妻藤 (2007) はこれが起こったことの指標として、各質問項目の回答者に渡る平均値と、質問項目内での評定値と確信度の回答者に渡る相関係数 (項目内評定確信相関) が直線関係になる (相関が 1 に近い) ことを論じた (確信度の内的サンプリング理論との関係は、妻藤, 2014)。このメタ相関係数を以下では r_v とする。

妻藤 (2007) では、他人の行動記述について、どの程度意図的であったかを尋ねた場合 r_v が非常に大きく、.90 以上であった。ただしフェイスシートに“あまり考え込まず”という文を入れていたので、教示において制御的思考を指示すると、直観的 (自動的) を指示するのでは結果が異なるかもしれない。妻藤 (2014) では“できるだけ直観的に”と“できるだけ考えて”という教示で r_v 等の変化を検討した。しかし、これらの教示は評定値や確信度平均また r_v にも影響しなかった。ただ、質問ごとに“直観的に答えた”、“思考的に答えた”および“両方”という選択肢を設けて教示違反率を出し、階層的重回帰分析で、項目内評定平均値と教示違反率の交互作用まで検討したところ、質問文が行動のみであった条件では、直観教示でこの交互作用も有意で、かつ重回帰係数が .99 を示した。他方直観教示でも行動の原因が質問文に付加されてる条件と、思考教示の場合では教示違反率も交互作用が有意ではなく、重相関係数は .82 から .94 の間であった。

しかし、各質問ごとに教示に従えたかを質問したことが影響して、判断処理の方式が変化してこのような結果になった可能性は否定できない。そこで、以下では、各行動文ごとに答え方の自覚を問う質問を削除した形で、 r_v と各項目評定平均から項目内評定確信相関を予測する直線回帰を再検討する。

方 法

大学 1・3 年生 242 名；回答不備が 12 名；有効数 230 名。妻藤 (2007) が Malle & Knobe (1997) の行動記述文セットより 10 個選んで、その行動を日本語で記述しなおした文。どの程度意図的だったかという質問に 5 点尺度 (スケールに○) で回答 (意図性評定)。この回答への確信度を 5 点尺度の数字

で回答。この“行動のみ”の各文にその行動の原因を付加した質問紙“原因付き”も作成。さらに教示を替えたフェイスシートを 2 種：“できるだけ直観的に答えてください (ただし考えないと答えられない場合は考えて)” (直観教示) と、“できるだけ考えてみた上で答えてください (ただし直観しかないときは直観で)” (思考教示)。このように 2 教示×2 記述タイプ (行動のみ, 原因付き) の 4 条件。各々について質問の異なるランダム順が 2 種。8 種を異なる回答者群に配布。

結 果 と 考 察

表 1 に示すように、 r_v はどの条件でも .94 以上であった。妻藤 (2007) では“行動のみ”.97 と“原因付き”.91 であり近い値である。思考教示でも .99 が見られた。他方、妻藤 (2014) では、直観教示・行動のみ .94, 原因付き .82；思考教示・行動のみ .94, 原因付き .90 であり、2014 では各項目ごとに教示に従えたかどうかの質問があると、少し小さい値になっている。やはり教示だけでなく、各質問ごとに直観的か思考的かの回答をいちいち求めたので、かえって判断の仕方に混乱が生じたケースが増えたのかもしれない。

表 1 各条件における r_v

	直観教示行動	原因	思考教示行動	原因
r_v	.95	.98	.99	.94

各項目の意図性平均を独立変数、項目内相関を従属変数とする直線回帰において、直観教示・行動のみで項目内相関が 0 になるのは意図性平均が 2.49, 原因付きでは 2.82。思考教示・行動のみでは 2.80, 原因付きでは 2.40。正確に 3.0 ではないが近い値であり、ほぼ評定値 3 を境にして項目内相関の正負が逆転している。この結果は教示や原因の付加があっても、確信度の変換値が評定値になっていることを示唆する。思考教示があっても“考える”に必要な情報が不足しているために、結局直観サンプリング (Koriat, 2011; 妻藤, 2014) を繰り返して“考えているつもり”になっているだけであり、そのことによって確信度の評定と同じ情報処理になっているのかもしれない。

引用文献

- Koriat, A. (2012). *Psychological Review*, 119, 80-113.
 Lieberman, M.D., Jarcho, J.M., & Satpute, A.B. (2004). *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 421-435.
 Malle, B.F. & Knobe, J. (1997). *Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 101-121.
 Michell, J. (2008). *Measurement*, 6, 7-24
 Rosenbaum, P. & Valsiner, J. (2011). *Theory & Psychology*, 21, 47-65.
 妻藤真彦 (2007). 心理学研究, 77, 541-546.
 妻藤真彦 (2014). 美作大学・同短大部紀要, 59, 7-16.